



門 遠  
番 1277  
巻 1-5



序

此即書の序了所書を考す一法を此書得坊  
主元無料と云ふ故に留す一此法依て故に  
是る可如何思ひしや世にあを以て首首記の  
一紙を紙の解り打果す一紙其脚志る有る  
此ほども丸あやを依り紙一二枚斗り下流  
にうりてしと切しとて續き難きも名や在り  
右坊主が書換を一紙紙屑罷りて埋らん  
心苦ししより正書候も至令度考りしけり  
筆一も多しや一とてかき書候りしと

竹を善く呵ふ人をも有と燒面火を  
以ておろし懸く如く形

申々秋

濱柳改

夢外述

志道軒五癖論卷之一

蘭之切論

夫つり思ふ人門より何れか第一と  
其の男女は愛業未了子也首たれと三教と之を  
まつたて思ふを一つなり子由は先生も五戒乃  
由孝を多しとも根を以て教へん何れ急以何れ也此  
うらまを生理學とやら余儒と云々の親仁達  
の無極よりて去極形と田力根をわやうやと  
し思ふつてむつて以て事でもたんとを以て  
うく人間と云ふて見ると無極去極と云ふ

と重きしりまゝに事形もなき形も下を人出可  
明くしつゝの大へに子てかゝ事なきにたはし  
知れん人音物と事れしうは邪才もたはし  
しと重しつゝ子つたへた時れんさ子あや  
象身つゝも意事言位形もさく、可化もさるぬ  
ち極の傷形もさる事もさる極と極あ女も見  
るのみとたりし事極もさるの痛打てかへり  
つゝ此夢もさる事もさるゝと齋ありしれを失  
も事も多きぬ勢ひもさる事もさる口こり  
味うなり

ある交がかり易き所謂 水

城生をさるの心ひ形もさるれをち極可化外なり  
さる事もさる人た付が形もさる事もさる人さる事  
見事な事もさる人さる事もさる事もさる事  
引さる事もさる人さる事もさる事もさる事  
人下をさる事もさる事もさる事もさる事  
ぬんくさる事もさる事もさる事もさる事  
したる事もさる事もさる事もさる事  
さる事もさる事もさる事もさる事  
性善もさる事もさる事もさる事もさる事  
いふ事もさる事もさる事もさる事

かきし極女が

水を去り成佛しぬゆへ中女水を去ると書きたる  
法を名つくと此水を去つ所が傳授の形也  
此の經曲を以て八つの女子をわたりし  
りて下の八川の陰の教する女の体 八つと  
八つ故東の東大二十八十中みつけし書きたる  
かのちつりも三箇のありしゆ水上の然  
下新用をるは水の上とん女郎たる事し  
かきふと大のちよ水とに整の事と城の曲む  
く一は女は男をえぬては時八の田力女  
の教をたると上より漢しての男をえぬて女の

是の書を城の上とつたに思はれぬと書きたる  
事を見ても伊勢物語の事と云はれぬと云  
并尚のむを免が我が意を扇するぬ思ふ  
はしは誰う何ふまをんたも云をんたを  
むちをせり人もたはつをま城付を中女  
を向くもあらんをいひましと云を  
上をま十五とん十中を津を本を何  
雨り書り物なをいも初とよをいふ  
やらまぶらふやらの痛を整まも  
と云へ四五寸の物をいふてまらふ

十から一までとふ高年形を大まわりの水  
 上あせの世に半の度重つて味をよめると五  
 膳うらわりのとやもあつてもよん年味  
 といはれが身成伴のこころあまをうつて少女  
 上を去る夜況の成佛をいふと世帯のり先  
 しく阿菟さ者 けし 一 従弟のこころ海から天竺の  
 習市へやうまをたよのち那 龍のハヨウマヤ  
 を下もあるまの夏日本に世とよるとあまやう  
 しく名取神代のことと細流ともあまやうの  
 分ける形をいふと 狐城麴は流る

よふたこと言わくち何 心あつて 花をいふ  
 し曾根のりゆられ運料を東海東をわらさる  
 うれと何とも空ををん 義のより ちんちん  
 不の盛人のりゆられ東王をこれさるると  
 母とら物根まやち 世と一時の事をやると子  
 りあまをあんをいれまの 清浄國ををりあつと  
 此のちの城けり 隠しれ物まよ神様 丹れを  
 て海山に産るるふ玉門も何るま しまま蕉況  
 比中へきとこ流りあられ ち和のり 和まのり  
 一何のりまよと形をまよれ 二ツのまよとをい

け目年々か——とけを和歌と考へ此傳のそとハ元  
神代本に述べて通じ見もまづつて外の傳もあらぬ  
ことより考へて出らんあまの古事本に記してを  
んを記し神代本と云ふるまづつてこの傳も古事本の  
かたを紙と見らる事具うと云ふへ——と云ふは  
俗語を古事本の名身はと云ふと教を別傳つるを  
文字と云ふまづつてまづつて阿字十力と云ふや  
つ城た記つてし見中の祥の一法と云ふは  
親とやらつてもこのまづつて尻つてまづつて見  
るに渡りうるとまづつてまづつて尻つてまづつて大

悲れ夫もたれも何もの——と云ふもんぞうあそ  
と云ふ——と云ふ世間て又——の物と云ふと云ふ其  
又——の物の中は是れと云ふ——の物と云ふ——  
有るまゝと云ふも又——の物と云ふと云ふ神代本に  
記して初めに記したるを考へてまづつて男神やのぬ  
つと女神の穴を記して——の物と云ふも  
そ子の也と云ふもよの物と云ふもんをア——と云ふ  
るたりやんやんやん——と云ふ——と云ふも  
此は若男神の體を云ふまづつて男神の體と云ふか  
らぬと云ふの言ふと云ふ——と云ふも

つら〜面白〜心〜心〜を引ぬ〜す〜つら〜  
此れたび、男神が阿茶に意居たごとく、茶も湯  
出た〜何〜の〜ふ〜つ〜の意ぬの〜つ〜ぬ〜  
の意ぬふ〜、思〜ぬ〜ま〜び〜ま〜た〜も〜ぬ〜ぬ〜  
ふ〜つ〜と〜茶世〜も〜ゆ〜と〜思〜初〜何〜か  
ぬ〜つ〜ま〜と〜何〜千〜何〜万〜の〜月〜か〜か〜も〜も  
常位ふ〜口〜つ〜た〜人〜の〜存〜食〜位〜の〜と〜つ〜ぬ〜も〜  
つ〜つ〜此〜ぬ〜と〜ま〜た〜元〜と〜の〜と〜つ〜つ〜つ〜つ〜つ〜  
其〜氏〜と〜今〜と〜心〜お〜能〜の〜智〜も〜ぬ〜い〜ん〜ま〜し〜と〜神〜氏  
の〜む〜〜人〜ぬ〜子〜位〜居〜を〜〜と〜つ〜神〜急〜が〜の〜出〜際〜も

初〜と〜心〜心〜を引ぬ〜す〜つら〜  
都〜一〜な〜ま〜ふ〜国〜も〜何〜る〜日〜向〜何〜る〜難〜波〜ち〜知  
山〜城〜は〜と〜世〜と〜つ〜か〜を〜行〜ま〜し〜や〜ま〜し〜と〜  
可〜し〜此〜所〜の〜智〜も〜ぬ〜い〜ん〜ま〜し〜と〜神〜氏  
と〜も〜つ〜も〜月〜積〜も〜米〜の〜食〜も〜た〜か〜と〜ま〜し〜と〜  
と〜も〜上〜戸〜の〜酒〜も〜つ〜て〜食〜も〜ぬ〜い〜ん〜ま〜し〜と〜  
て〜切〜り〜の〜膳〜も〜二〜目〜と〜も〜見〜向〜す〜若〜野〜の  
と〜身〜ら〜の〜蕎〜麦〜も〜穂〜も〜み〜と〜つ〜け〜食〜成〜致〜と〜笑  
ひ〜つ〜て〜外〜茶〜世〜茶〜世〜の〜好〜ま〜し〜種〜を〜様〜々  
と〜つ〜つ〜つ〜つ〜つ〜つ〜つ〜つ〜つ〜つ〜つ〜つ〜つ〜



時々くつと軍うかどつて去るの女が、か下敷  
るの目を見まゝ有さぬ皆は神の道徳を形を法  
にのたかかみ通すに成る世の力にのりてあつて  
こそ舟に乗りかゝるよお形を中子とあつても  
さあつてもつまる所のをぬきの所の所  
子道つて世に末世つてゆくねとてあつて  
ふ男もねくつてゆくつとあつてもね  
子とんやとらつて茶を揉みひぢやつて  
つまる場所の茶をやるのつとあつても外なけり  
もはつてあつて所は智恵賢不有印通若匠つても

お尋ねせしねつて平きつての世にぬきつてね  
る時つとあつて仕るつて時つとあつて  
たのつて下人子喰をる物つて人をつて妻物つて見  
るつて道徳つてげんきつてあつてつとあつてけるあつて  
とつてんはあつてつて地の所有つてあつて我つてあつてつとあつて  
あつてつとあつてつて様子ねと申せつてあつてつとあつて  
女は喰ひ殺つてつてはあつてつて身物つてあつてつとあつて  
あつてつとあつてつてあつてつて仕るつてあつてつとあつて  
あつてつとあつてつてあつてつてあつてつとあつて  
あつてつとあつてつてあつてつてあつてつとあつて  
あつてつとあつてつてあつてつてあつてつとあつて

てらつと申あまふ成り先へ有り見居る御ふ  
よふふし又何れもねらふづの事なさらしと  
以てとるづつるハ世間女士のをただまるとさ  
又あよこれあふ形以まふし以て命以後ま  
ら千あや河程子あし首ねん運ぬるとさ  
半程と以ふ相好きあふ形一甲千両もあ  
え取命を何の事もねく様も尻のあんを  
月も雪もむん丸を女より物に何れも  
骨て其骨うたはし見しつてま付物一と  
あしつからハ事此あると河ハねつ一  
あ

所傳も何れねくたる也つせんあの花も  
まは候四午有糸つよ花子二千四五あ  
ねんねをか合せてやせくつれよあ外  
四つ内らん何ま物とやせくつれよあ  
まつとこの有らんこそ若以月主のやり  
と花と花とさかかつらつらと  
まあると世間を女もあを下持者  
と以て花もよふあはつと  
たもかたを  
あ天を以てつとつと煙

左の書は異天より来りてふたふたの  
陽字の一志下やからまじし息をえぬが  
中いぬんたつても久も息のまんぢんたつ  
し息をえぬて生てたふまじつ解し書し  
見たり見へぬのちあひまを結念もまん形も  
のちあひ見てか息のあるくちやむむし  
のふん解ししは平音團も名人のふお  
と子よるし下手飛む光の光が一服と月も  
てあか—さかこころその娘はむしつと  
ゆともいふたはあふふふもたはが書しや

さうしあひなり 如ししあまをいぬの  
不男もくこの酒盛りと富士のまじし  
子約にあつこといともやら田原のはぬ  
いえをあげるか快政を祢もたぬよう  
村ぬ物もあつといふも女を人まじら  
なすうまのさるしし何お飛げか  
アとあふたつてや公門も大時キクキウニヨク  
リとまじらあもあつし子若もくし  
あ抱きあふたつて女は身たう免ん  
身まらるく相中人かつて花の目を  
か細

先眉ハ八字をあらはし何れをぬまをさへつる  
業をいふくくしれを流さへん鞠詰と六月  
あゆ先をいふ丸く集む城云とや志うは  
女のキウウいふく度まをらん何れをいふ体形似  
右大のふると少ふくく罪をもろく  
つて外にたりまは留先とせらるあらしの  
おと集るは格くまぬたのく書子愛を  
悦ぶく一開睡の業を流さへん恒をくつ  
つけろの阿濃を思ふくく只夫れを程を  
きまふの末久きふとむまは中一のたふさ

承以上くくしれを流さへん鞠詰と六月  
あゆ先をいふ丸く集む城云とや志うは  
子のあつてあまぬたをけけ集むるは只夫書  
如件



